

いかに学生の弱点を自覚させ、価値ある変化に連結させるのか

香取尚美 谷口智也 望月泰男 大西英文
(昭和医療技術専門学校)

Key words : 客観的検査技術能力試験、改善プログラム、3つのコース、伸展教育

【目的】臨地実習は、学生を良い方向へ育てるための重要な教育である。その反面、実習のあり方や学生自身のやる気が大きく成長に左右される。本校で実施している臨地実習前の客観的検査技術能力試験は、学生の基本的な技術能力を明確にすることを目的としている。そこで、今回その能力試験結果を基にして、学生の弱点を克服するための教育プログラムを組み立てた。その上で、学生の自主性により実践教育を展開したので報告する。

【対象及び方法】対象は平成18年度第2学年生76名、事前アンケート調査日は平成19年3月1日、改善プログラム期間と内容は3月15日～29日(延べ15日間)、3つのコースに分け、半日単位で 接遇コース5日間(10名程度)、 技術コース5日間(20名程度)

学力コース5日間(40名程度)行う。各コースの選別の方法は、学生アンケートを基軸に学生と教員が十分に話し合い決定する。

(と は技術能力試験結果からの教員推薦、 は第2学年次の成績結果を考慮) はロールプレイ法やビデオを用い、コミュニケーションを図れるように導く はマイクロピペット操作、顕微鏡の取り扱い、採血技術、希釈系列・塗抹標本の作製、染色標本の観察等を行う は専門科目の要点のまとめを行う。改善プログラム終了後、学生へのアンケート調査と対面式聞き取り調査を実施する。

【結果】事前アンケート調査では、『臨地実習で期待と不安はどちらが大きいですか』との問いに7割の学生は不安があると答えた。

その理由を尋ねると、技術、知識、コミュニケーションによるものであった。又、改善プログラム終了後では 実際に『参加して良かったか』の問いに対し、全員が良かったと回答した。又、その理由を尋ねると、自分自身を知ることができた。元気で明るい挨拶が少しできる様になった。友達の姿を見ることで、改善しなければならないと感じた。 では、『参加して良かったか』の問いに、全員が良かったと回答した。その理由はマイクロピペットの操作に自信がついた・採血がうまくできるようになった・希釈系列の操作に自信が持てるようになった・顕微鏡の正しい使い方が分かった等によるものであった。 では、『参加して良かったか』との問いに、7割の学生が良かったと回答したが、3割の学生は逆に不安を感じたと回答した。不安理由は、限られた時間内で、知識が身に付いていない焦りによるものであった。

【考察】本校では学生間の結合(横と横、縦と縦)を強固にしながら学校全体を発展させる伸展教育を実施している。今回の試みは学生一人一人の臨地実習がより有意義なものとなるように考案した。いずれのコースにおいても、学生から高い評価が得られ、その過程で学生同士の繋がりや教員との信頼関係が着実に築かれている。しかし、技術面と比べ、特に接遇面は実際の医療現場で行動を伴うには難しい面が多く、早い段階での教育プログラムが必要と思われる。

連絡先 : igi-rinken@showa.ac.jp